

◎ 日汉对照世界名著丛书

呼啸山庄

嵐が丘

艾米莉·勃朗特

著

- 日文翻译 / 田中西二郎
- 中文翻译 / 杨苡
- 编校 / 孟瑾

2

呼啸山庄

吉林人民出版社
JILIN DAXUE CHUBANSHE

日汉对照世界名著丛书

呼啸山庄

原 著 艾米莉·勃朗特 日文翻译 田中西二郎
中文翻译 杨 苡 编 校 孟 瑾

吉林大学出版社

日汉对照世界名著丛书

呼啸山庄

原 著 艾米莉·勃朗特 日文翻译 田中西二郎
中文翻译 杨 苡 编 校 孟 瑾

责任编辑、责任校对:张显吉

封面设计:张沐沉

吉林大学出版社出版
(长春市解放大路 125 号)

吉林大学出版社发行
长春市永昌福利印刷厂印刷

开本:850×1168 毫米 1/32

2000 年 5 月第 1 版

印张:17.75 插页:4

2000 年 5 月第 1 次印刷

字数:665 千字

印数:1-5 000 册

ISBN 7-5601-2372-4/I·123

定价:24.00 元

出版者的话

为了提高日语学习者的阅读能力和兴趣，加深对日本语言文化的理解，我们邀请了吉林大学部分日语专家和学者编写了日汉对照世界名著丛书（全译本）第一辑、第二辑。

本辑（第二辑）所选世界名著（《我是猫》、《包法利夫人》、《傲慢与偏见》、《双城记》、《呼啸山庄》），日文采用日本最著名版本，中文采用译林出版社译本，均出自我国著名翻译家之手。因此，所选版本具有权威性。

丛书采用同面相对的日汉对照方式，即日文原文与相应的中文同面对应，这样便于读者参照阅读，在两种语言环境中体会世界名著的魅力。

丛书充分考虑到了日文和中文的不同阅读习惯，在版面安排上，日文、中文均横排；日文排在上，中文排在下，既相互对应，又独立成文。使用文字字体也均采用日文和中文的通用字体。

本辑的出版，得到了日本岩波书店、日本在华日语专家东海林健先生、吉林大学外语学院的部分专家以及江苏译林出版社竺祖慈先生等的支持和帮助，在此一并表示深深的谢意。同时，由于我们的水平和力量所限，不足之处在所难免，敬请读者不吝赐教。

吉林大学出版社

2000年5月

一八〇一年

僕は今しがた、こんど借りた家の家主をたずねて、帰ってきた——これからの僕がかかりあいになるたった一人の隣人を。まったくここはすてきな田舎だと思う。イングランドじゅう捜しても、これほど世間のごたごたから隔離された場所が選べようとは、思いもよらなかった。人間嫌いどもにとっては申し分のない天国なのだ——しかもあのヒースクリフ氏なる男と僕とは、二人してこの寂しさを分けあうにお誂え向きの好一對ときている。いや、すごい男もいたものだ！僕が馬で乗りつけたとき、あの男の黒っぽい両眼が、いかにもうさん臭そうに眉毛の下へひっこみたがっていた、その顔つきといい、つづいて僕が名を名のったときには、チョッキの裏へ差し込んだ両手の指先を外へ出しでもすることか、少しでも気を許すまいとするように、なおさら奥へ押し込んだ様子といい、僕のほうではたまらない親しみを彼に感じてしまったのだが、むろん先方はそんなこととは夢にも気がつかなかった。

「ヒースクリフさんでいらっしゃいますか？」

一つうなずいたのがその返事だった。

一八〇一年。

我刚刚拜访过我的房东回来——就是那个将要给我惹麻烦的孤独的邻居。这儿可真是一个美丽的乡间！在整个英格兰境内，我不相信我竟能找到这样一个能与尘世的喧嚣完全隔绝的地方，一个厌世者的理想的天堂。而希刺克厉夫和我正是分享这儿荒凉景色的如此合适的一对。一个绝妙的人！在我骑着马走上前去时，看见他的黑眼睛缩在眉毛下猜忌地瞅着我。而在我通报自己姓名时，他把手指更深深地藏到背心袋里，完全是一副不信任我的神气。刹那间，我对他产生了亲切之感，而他却根本未察觉到。

“希刺克厉夫先生吗？”我说。

回答是点一下头。

嵐が丘

「こんど、お家を拝借したロックウッドでございます。わたくしがあまりしつこくあのスラシュクロス屋敷に住まわせて頂くようお願いしましたもので、ご迷惑だったのじゃないかと思ひまして、そのお詫びかたがた、ご当地へ参るとさっそくご挨拶に参上しましたわけです。昨日うかがったところではなにか別にお考えもありませんような——」

「スラシュクロス屋敷はわたしの持ち家ですからな」眉をひそめて僕をさえぎり、「せんでも済む迷惑なぞ、他人にかけられてたまるもんですか——まあお入り！」

このまた「お入り」が、口を結んだままのモソツとした言い方で、内心のところは「とつとと失せおれ」と言いたい気持だということがはっきり判るうえに、彼のもたれかかっている門の扉さえも、この言葉に応じて動こうとする様子も見せない。ところが僕は僕で、こんな調子だからこそ誘いに応じる気にもなったので——つまり自分以上にことさらに人づきあいの嫌いなことを見せつけるこの男が、すっかりおもしろくなってしまったのだ。

僕の乗ってきた馬の胸が、木戸をまともに押しつけるのを見とどけてから、やつと相手は手を懐ろから出して錠をはずし、さて不機嫌な顔で先に立って、盛土道を歩いて行ったが、中庭へはいったところで、「おいジョーゼフ」とよび、「ロックウッドさんのお馬を連れて行け。それから葡萄酒を持ってこい」

(なるほど、すると召使は一人しかいないな)という考えが、この二つの命令を一度にしてのけたのを聞いて、おのずと僕の頭に浮かんだ。(道理で、敷石の間の草は伸びほうだい、人間の代りに家畜にばかり生垣の芽を摘ませてるわけだ)

“先生、我是洛克乌德，您的新房客。我一到这儿就尽可能马上来向您表示敬意，希望我坚持要租画眉田庄没什么使您不方便。昨天我听说您想——”。

“画眉田庄是我自己的，先生。”他打断了我的话，闪避着。“只要是我能够阻止，我总是不允许任何人给我什么不方便的。进来吧！”

这一声“进来”是咬着牙说出来的，表示了这样一种情绪：“见鬼！”甚至他靠着的那扇大门也没有对这句许诺表现出同情而移动；我想情况决定我接受这样的邀请：我对一个仿佛比我还更怪僻的人颇感兴趣。

他看见我的马的胸部简直要碰上栅栏了，竟才伸手解开了门链，然后阴郁地领我走上石路，在我们到了院子里的时候，就叫着：

“约瑟夫，把洛克乌德先生的马牵走。拿点酒来。”

“我想他全家只有这一个人吧，”那句双重命令引起了这种想法。“怪不得石板缝间长满了草，而且只有牛替他们修剪篱笆哩。”

ジョーゼフはもういい年をした——いや、達者そうな顔丈な足腰はしているけれど、もう老人の部で、おそらくひどい年寄りに違いない。「ああどうぞや神さま！」と、さもいやな用事と言わぬばかりにぶつぶつ独言を言い、馬を僕の手から引き取りながら、渋い顔をして目を離さずに僕の顔をあまりじろじろ見るから、こちらもかわいそうになって、きつとこの爺さん、神さまのお助けを求めているのは昼飯がよくこなれますようにとお願いしているので、何も僕が不意にやって来たために罰あたりな文句を口走ったわけでもあるまいと、善意に解釈しておいた。

「ワザリング・ハイツ」というのが、ヒースクリフ氏の屋敷の名だ。「ワザリング」とは、嵐のときにこの丘のようなところに吹きすさぶ風の怒り騒ぐさまを形容した、巧みなこの辺の方言である。なるほどあの高みでは、さぞ清らかな、凛烈な大気が、絶え間なく吹きかよっていることだろうと思わせる——崖越しに吹きつける北風の威力は、家屋の端のところのいじけた数本の樅の木が、ひどく斜めに延びていることから、また立ち並ぶせこけた茨の枝々が、どれもこれも、乞食のように日光の恵みを求めて、一方へばかり腕さしのべているさまからも、容易に察せられるだろう。幸いに設計者がこの家を頑丈に建てるだけの先見を持ち合わせていたとみえ、幅の狭い窓は壁から奥深く設けられているし、隅という隅は大きな張出石で風を防いでいる。

敷居をまたぐ前に、僕は立ち止まって、建物の前面、ことに正面の扉のあたり、惜しげもなく彫り散らされた奇怪な装飾彫刻を賞美した。扉の上、くずれかかった半獅子半鷲神どもと、恥知らずな姿をした男の子たちが群がっている中に、

约瑟夫是个上年纪的人，不，简直是个老头——也许很老了，虽然还很健壮结实。“求主保佑我们！”他接过我的马时，别别扭扭地不高兴地低声自言自语着，同时又那么愤怒地盯着我的脸，使我善意地揣度他一定需要神来帮助才能消化他的饭食，而他那虔诚的突然喊叫跟我这突然来访是毫无关系的。

呼嘯山庄是希刺克厉夫先生的住宅名称。“呼嘯”是一个意味深长的内地形容词，形容这地方在风暴的天气里所受的气压骚动。的确，他们这儿一定是随时都流通着振奋精神的纯洁空气。从房屋那头有几棵矮小的枫树过度倾斜，还有那一排瘦削的荆棘都向着一个方向伸展枝条，仿佛在向太阳乞讨温暖，就可以猜想到北风吹过的威力了。幸亏建筑师有先见把房子盖得很结实：窄小的窗子深深地嵌在墙里，墙角有大块的凸出的石头防护着。

在跨进门槛之前，我停步观赏房屋前面大量的稀奇古怪的雕刻，特别是正门附近，那上面除了许多残破的怪兽和不知羞的小男孩外，

嵐が丘

「一五〇〇年」という年代と、「ヘアトン・アーンショー」という名前とを見つけた。二言三言、それについて感想を述べ、にが顔のこの家のあるじから、この屋敷の手短かな来歴をでも聞き出そうかと思わぬでもなかったが、戸口に立ったときの主人の態度は、さっさと入るか、さもなくばグズグズせずに帰ってもらいたいらしいそぶりだったので、まだ奥の様子も見ぬうちに、その痼癖をよけいにつらせるのはまずいと考えなおした。

ロビーも通路も、なんのついででもなしに、いきなり一またぎで、家族居間の中に連れ込まれた。こういう部屋のことをこの土地では格別に「家」^{ハウス}と称している。通例は台所と内座敷もその中に含まれるのだが、“嵐が丘”では台所だけは他の一角に立ちのかさされているらしい——少なくとも家のずっと奥のほうに、人の話し声と台所道具を扱う物音とが、僕の耳には聞き分けられた。のみならずこの部屋の大燗炉には煮炊きをしたりパンを焼いたりしている形跡はなく、壁にも、ピカピカ光る赤銅鍋や錫の水漉器なども一つも見えない。もともと、室の一角に雄大な檜材の棚があって、数かぎりもない白鐵製の皿が幾列にも積み重ねられ、あいだに銀製の壺や大コップも交えて、層々と屋根まで届くおびたしいそれらの列が、すさまじく大炉の光と熱とを反射させていた。屋根には天井板がまるでなく、気をつけて眺めまわせばその椀組の隅々まで明らかに見えて取れるが、ただ一個所、わく木を取りつけて、燕麦菓子や牛肉、羊肉、ハムなどのたばねた足をつるしてあるところだけ、屋根がふさがっている。炉の上には、さまざまな憎々しげな古い小銃と、一對の大型拳銃とがおかれ、張出縁にそって、毒々しい色に塗った茶葉入れの小箱

我还发现“一五〇〇”年代和“哈里顿·恩萧”的名字。我本想说一两句话，向这傲慢无礼的主人请教这地方的简短历史，但是从他站在门口的姿势看来，是要我赶快进去，要不就干脆离开，而我在参观内部之前也并也不想增加他的不耐烦。

不用经过任何穿堂过道，我们径直进了这家的起坐间：他们颇有见地索性把这里叫作“屋子”。一般所谓屋子是把厨房和大厅都包括在内的；但是我认为在呼啸山庄里，厨房是被迫撤退到另一个角落里去了；至少我辨别出在顶里面有喋喋的说话声和厨房用具的磕碰声；而且在大壁炉里我并没看出烧煮或烘烤食物的痕迹，墙上也没有铜锅和锡滤锅之类在闪闪发光。倒是在屋子的一头，在一个大橡木橱柜上摆着一叠叠的白镏盘子；以及一些银壶和银杯散置着，一排排，垒得高高的直到屋顶，的确它们射出的光线和热气映照得灿烂夺目。橱柜从未上过漆；它的整个构造任凭人去研究。只是有一处，被摆满了麦饼、牛羊腿和火腿之类的木架遮盖住了。壁炉台上有杂七杂八的老式难看的枪，还有一对马枪；并且，为了装饰起见，还有三个画得俗气的茶叶

が三つ、飾りのつもりらしく並べてある。床はなめらかな白い石敷で、椅子はもたれの高い、素朴な造りの、緑色に塗ったので、薄暗いあたりに重そうな黒い椅子も一つ二つ、わだかまっている。食器棚の下の弓形の空間に、大柄な赤黒い色のポインターの雌が一匹、キーキー声で鳴く一群の子犬に取り巻かれて、ねそべっていて、ほかにも何頭かの犬が、あちこちの隅をうろうろしている。

部屋も飾りつけも、ありきたりの質朴な北国の農夫の家に見かけるものと、どれ一つとして風変わりなところはない。頑固一徹なつらがまえ、膝きりズボンにゲートルといういでたちに、その逞しい腕や足を引き立たせたお百姓が、こういう居間の肘掛け椅子に腰を下ろし、丸テーブルの上のビールの泡を浮かべたコップを前にしている図は、晩餐後のしかるべき時刻を見計らって行きさえすれば、この近傍の山中五、六マイル以内のどこでも見られる。だがヒースクリフ氏は、氏の住居や生活様式とは、甚だ奇妙な対照をなす人物だ。この人は、風貌は皮膚の色の黒いジプシーのようで、身装と物腰とはジエントルマンである——言いかえれば、たいていの田舎の地主様にひけをとらぬ程度の紳士である。いくらか自堕落には見えるかもしれないが、その投げやりなところがそう大して不都合にも感ぜられないのは、その風采がキリッとして端麗だからで、それにどちらかといえば取りつきにくいところもある。それを人によっては、よっぽど品の悪い高慢なやつだとも思うこともありそうだが、僕にはなんとなくこの人に共鳴を覚えるものがあって、まるで違った感じを受ける。人を寄せつけぬ彼の態度は、ことさらに感情をむきだしに見せつけるのを——人間どうしの好意を形に表わすのを——避けようとする気持から来ていることが僕には直覚的に、わかるのだ。

罐靠边排列着。地是平滑的白石铺砌的；椅子是高背的，老式的结构，涂着绿色；一两把笨重的黑椅子藏在暗处。橱柜下面的圆拱里，躺着一条好大的、猪肝色的母猎狗，一窝唧唧叫着的小狗围着它，还有些狗在别的空地走动。要是这屋子和家具属于一个质朴的北方农民，他有着顽强的面貌，以及穿短裤和绑腿套挺方便的粗壮的腿，那倒没有什么稀奇。这样的人，坐在他的扶手椅上，一大杯啤酒在面前的圆桌上冒着白沫，只要你在饭后适当的时间，在这山中方圆五六英里区域内走一趟，总可以看得到的。但是希刺克厉夫先生和他的住宅，以及生活方式，却形成一种古怪的对比。在外貌上他像一个黑皮肤的吉普赛人，在衣着和风度上他又像个绅士——也就是，像乡绅那样的绅士；也许有点邋遢，可是懒拖拖的并不难看，因为他有一个挺拔、漂亮的身材；而且有点郁郁不乐的样子。可能有人会怀疑，他因某种程度的缺乏教养而傲慢无礼；我内心深处却产生了同情之感，认为他并不是这类人。我直觉地知道他的冷淡是由于对矫揉造作——对互相表示亲热感到厌恶。

嵐が丘

愛するにも憎むにも、ひとしくこの人は心の内側だけにとどめて、逆に他人から愛されたり憎まれたりするのは無益無用のことだと軽蔑^{けいべつ}しているのだろう。——いや、これは少し早まりすぎたかもしれぬ。これでは僕自身の性格をほしいままに彼に押しつけてしまっている。ヒースクリフ氏が、押しつけがましくちかづきになろうとする相手に会ったときに、そ知らぬ顔でそっぽを向くのは、同じような場合の僕自身の気持とは大いに違ったわけがあつてのことかもしれないのだ。むしろ僕の気質のほうこそ人並みはずれていると思うべきだろう——現に僕の生みの母が、おまえはきつと幸せな家庭は持てないよと、口ぐせに言ったくらいで、しかもまったくその通りであることを、この夏、みごとに自分で証明してしまつたのだから。

すがすがしい海べの一カ月を楽しんでいりうち、僕はゆくりなく身も魂も打ち込みたくなる相手にぶつかつてしまつた——その相手が僕に目もくれなかつたうちは、彼女は僕の目には女神としか見えなかつた。僕はけつして口に出しては「思いのたけを告げまいらせず」にいたが、もし目が口ほどにものを言うものなら、どんな馬鹿^{ばか}でも僕がくびつたけなことはわかつたろう。彼女もとうとうわかつてくれて、流し目を返してくれるようになった——その瞋^{いらだ}ざしのうるわしさ、まったく想像を絶していた。ところで、僕はどうかしたか？ 恥かしいが白状する。——氷のようにかじかんで、かたつむりのように自分の殻の中へ逃げ込み、ちらりちらり見られれば見られるほど、ますます冷たいそぶりですよそよそしく尻^{しつ}ごみしてしまうのだ。だからとうとうかわいそうに、初心^{しんしん}なお嬢^{ぢやう}さんは、自分の勘違^{かんちがひ}いだったかと思うようになり、たいへんな間違いをしでかしたと思ひ込んだものだから、

他把爱和恨都掩盖起来，至于被人爱或恨，他又认为是一种鲁莽的事。不，我这样下判断可太早了：我把自己的特性慷慨地施与他了。希刺克厉夫先生遇见一个算是熟人时，便把手藏起来，也许另有和我所想的完全不同的原因。但愿我这天性可称得上是特别的吧。我亲爱的母亲总说我永远不会有舒服的家。直到去年夏天我自己才证实了真是完全不配有那样一个家。

我正在海边享受着一个月的好天气的当儿，一下子认识了一个迷人的人儿——在她还没注意到我的时候，在我眼中她就是一个真正的女神。我从来没有把我的爱情说出口；可是，如果神色可以传情的话，连傻子也猜得出我在没命地爱她。后来她懂得我的意思了，就回送我一个秋波——一切可以想象得到的顾盼中最甜蜜的秋波。我怎么办呢？我羞愧地忏悔了——冷冰冰地退缩，像个蜗牛似的；她越看我，我就缩得越冷越远。直到最后这可怜的天真的孩子不得不怀疑她自己的感觉，她自以为猜错了，

どうしていいか判らなくなつて、そこそこに母親をくどいて引き上げて行ってしまった。僕はこういう奇妙な性分のおかげで、ひとからはわざとそんな冷血な仕打ちをする男のように言われるようになったが、この定評のはなはだしく不当なことは、自分にだけはよく判っているのだ。

あるじが炉石の一方の端へ歩み寄つたので、僕はその向こう側の端に席をとつたが、例の親犬がいつのまにか子犬たちのそばを離れて、^{くちびる}唇をそりかえらせ、白い歯によだれをためてかみつきそうに口を開いて、^{おおおかみ}狼のように僕の足のうしろに忍び寄っていた。しばらくは話もない所在なさに、その^{くび}頸をなでてやった。すると雌犬はのどの奥から長いうなり声を出した。

「その犬にはかまいなさらんがいい」ヒースクリフ氏がそれにつれてうなるように言いながら、それでも犬がそれ以上はげしい所作をしないように、足をあげてほん^と蹴りつけた。

「甘やかされることは知らんやつです——なぐさみに飼つとるのでないから」そして、横側の扉のほうへ大またに歩いて行って、また大声で「ジョーゼフ」とどなった。

ジョーゼフは穴蔵の奥でなにかぶつぶつ言ったが、すぐ上がってきそうな返事はしないので、あるじのほうから彼のところへ降りて行った。あとには僕が、例のおっかない雌犬と、雌犬と同じように僕の一举一動を油断なく見張っている羊用の番犬二匹、これも恐ろしげな毛むくじゃらのやつらと、差向かいで残されることになった。やつらの^{はば}牙にかかるのは、あまり感心しなかつたから、僕はおとなしくすわっていた。

感到非常惶惑，便说服她母亲撤营而去。由于我古怪的举止，我得了个冷酷无情的名声；多么冤枉啊，那只有我自己才能体会。

我在炉边的椅子上坐下，我的房东就去坐对面的一把。为了消磨这一刻的沉默，我想去摩弄那只母狗。它才离开那窝崽子，正在凶狠地偷偷溜到我的腿后面，呲牙咧嘴地，白牙上馋涎欲滴。我的爱抚却使它从喉头里发出一声长长的狺声。

“你最好别理这只狗，”希刺克厉夫先生以同样的音调咆哮着，跺一下脚来警告它。“它是不习惯受人娇惯的——它不是当作玩意儿养的。”接着，他大步走到一个边门，又大叫：“约瑟夫！”

约瑟夫在地窖的深处咕哝着，可是并不打算上来。因此他的主人就下地窖去找他，留下我和那凶暴的母狗和一对狰狞的蓬毛守羊狗面面相觑。这对狗同那母狗一起对我的举动都提防着，监视着。我并不想和犬牙打交道，就静坐着不动；

嵐が丘

だが、口に出してさえ言わなければ馬鹿にしたって判らぬだろうと思ったのが運のつきで、いい気になって目をパチクリしたり、ふざけた顔をしてみせたり、その三匹をからかっているうちに、いろいろ変る顔の格好のなかで、ひどく犬奥さまのど機嫌にさわる人相があったとみえ、いきなり腹を立てて僕の膝にとびついてきた。僕は突きもどして、あわててテーブルの向こう側へのがれた。これがキッカケで、蜂の巣を突いたようなことになり、大小老若さまぎまの四つ足の悪鬼どもが六匹、それぞれの巣窟から、まんなかの広いところへ現われ出た。おもに踵と上着の裾とをねらってとびついてくるようだ。一生懸命、火かき棒で大きいやつを攻撃をどうにか受けながしてはいたものの、僕はやりきれなくなって、大声で誰か来てこの場をとりしずめてくれと、家の者の救援を求めた。

ヒースクリフ氏と下男とは、しゃくにさわるほど平気の平左で、穴蔵の階段を上がってきた。暖炉の前は、かぶりつく、ほえる、ものすごい修羅場と化しているのに、ふだんより一秒と急ぐ気配もない。さいわいほかに一人、台所からいち早く出て来てくれた人がある。大柄なおばさんで、上っぱりの裾をからげ、火のほてりで真っ赤な頬、まくり上げた腕にフライパンを振りまわしながら飛び込んできて、われわれのまんなかへ割って入り、得物ばかりでなく舌を使ってまくしたてると、とたんに魔法のように嵐が静まり、たちまち暴風のあとの海のように胸を波うたせている彼女一人のほか、誰もいなくなったときに、やっと彼女の主人が現われた。

「いったいこりゃなんたることです！」僕の顔をにらみつけてのこの言いぐさには、さんざんな虐待をうけた直後だけに、さすがに僕も我慢がなりかねた。

然而，我以为它们不会理解沉默的蔑视，不幸我又对这三只狗挤挤眼，作作鬼脸，我脸上的某种变化如此激怒了狗夫人，它忽然暴怒，跳上我的膝盖。我把它推开，赶忙拉过一张桌子作挡箭牌。这举动惹起了公愤；六只大小不同、年龄不一的四脚恶魔，从暗处一齐窜到屋中。我觉得我的脚跟和衣边尤其是攻击的目标，就一面尽可能有效地用火钳来挡开较大的斗士，一面又不得不大声求援，请这家里的什么人来重建和平。

希刺克厉夫和他的仆人迈着烦躁的懒洋洋的脚步，爬上了地窖的梯阶：我认为他们走得并不比平常快一秒钟，虽然炉边已经给撕咬和狂吠闹得大乱。幸亏厨房里有人快步走来：一个健壮的女人，她卷着衣裙，光着胳膊，两颊火红，挥舞着一个煎锅冲到我们中间——而且运用那个武器和她的舌头颇为见效，很奇妙地平息了这场风暴。等她的主人上场时，她已如大风过后却还在起伏的海洋一般，喘息着。

“见鬼，到底是怎么回事？”他问。就在我刚才受到那样不礼貌的接待后，他还这样瞅着我，可真难以忍受。

「なんたることだろう、まったく！」と僕はつぶやいて、「悪鬼につかれた豚の群れだって、お宅の畜生どもほど根性が悪くはなかったでしょうな。あなたは初対面の客を虎どもといっしょに置き去りにでもする方だ！」

「何もしない人には、手出しはせんはずだ」酒びんを僕の前において、テーブルを元の位置に戻しながら、あるじは言う。「見慣れん人を警戒するのは犬の本分というものだ。葡萄酒一杯いかがです？」

「いや、けっこうです」

「噛まれはせんのでしょうか？」

「噛まれてもしたら、ぼくだって噛んだやつに極印を残してやりますよ」

ヒースクリフの顔の表情がゆるんで、にやりと笑った。

「まあまあ、ロックウッドさん、そう興奮せんで、さ、葡萄酒でも少しおやりなさい。この家に客人が見えるというのは、とんとまれなことだから、わしも犬どもも、正直いうてお客人のおあしらいの仕方をろくに知らんのです。ご健康を祝して、さあ、いかがですな？」

僕はお辞儀して、お返しの乾杯をした。下種犬どもの無礼に、いつまでもふくれ面しているのは愚かな話だと気がつきはじめたからだ。それに、このうえこちらの気のきかぬところをさらけだして、相手をおもしろがらせてやるのがいまいましくもあった。

“是啊，真是见鬼！”我咕嘟着。“先生，有鬼附体的猪群，还没有您那些畜生凶呢。您倒不如把一个生客丢给一群老虎的好！”

“对于不碰它们的人，它们不会多事的。”他说，把酒瓶放在我面前，又把搬开的桌子归回原位。

“狗是应该警觉的。喝杯酒吗？”

“不，谢谢您。”

“没给咬着吧？”

“我要是给咬着了，我可要在这咬人的东西上打上我的印记呢。”

希刺克厉夫的脸上现出笑容。

“好啦，好啦，”他说，“你受惊啦，洛克乌德先生。喏，喝点酒。这所房子里客人极少，所以我愿意承认，我和我的狗都不大知道该怎么接待客人。先生，祝你健康！”

我鞠躬，也回敬了他；我开始觉得为了一群狗的失礼而坐在那儿生气，可有点傻。此外，我也讨厌让这个家伙再取笑我，因为他的兴致已经转到取乐上来了。

嵐が丘

あるじの機嫌がなおったのはそのせいらしいのだから。彼は——たぶんそろばんをはじいて、ためになる借家人を怒らせるのは馬鹿らしいと考えたのだろう——端々を削り落したようなぶっきらぼうな言葉遣いを少しばかりやわらげて、僕が興味を持ちそうと思う話を持ち出した——つまり、こんど僕が隠居所として借り入れた家の長所短所について、講釈しはじめたのだ。この話題にかけては、あるじは実になんでもよく知っている。それで僕は大きいにおもしろくなり、いとまをつけるころには、よし一つ明日も出かけて来ようという気になった。先方が僕の再度の押しかけ訪問を望んでいないことは明らかである。かまうものか、行ってやる。あの男と比べては、僕のほうがずっと交際好きのように思えるのだからあきれたものだ。

2

昨日は午後から霧が立って、寒くなった。嵐が丘までヒースと泥濘のなかを苦勞して渡って行かなくとも、書齋の火のそばで過ごしたほうが、と思わぬでもなかった。ところが正餐をすませて二階へ戻ろうと（注——僕は十二時と一時のあいだに正餐をしたためる。この家の家具同然に、借りると同時に雇い入れた家政婦の親切なおばさんが、五時に正餐を出してくれという僕の頼みを、どうしても聞きわけてくれない——というよりも聞きわけようとしてくれないのだ）右のものぐさな見で階段をのぼり、書齋へ足を踏み入れてみると、

也许他也已察觉到，得罪一个好房客是愚蠢的，语气便稍稍委婉些，提起了他以为我会感兴趣的话头——谈到我目前住处的优点与缺点。我发现他对我们所触及的话题，是非常有才智的；在我回家之前，我居然兴致勃勃，提出明天再来拜访。而他显然并不愿我再来打搅。但是，我还是要去。我感到我自己跟他比起来是多么擅长交际啊！这可真是惊人。

2

昨天下午又冷又有雾。我想就在书房炉边消磨一下午，不想踩着杂草污泥到呼啸山庄了。

但是，吃过午饭（注意——我在十二点与一点钟之间吃午饭，而可以当作这所房子的附属物的管家婆，一位慈祥的太太却不能，或者并不愿理解我请求在五点钟开饭的用意），在我怀着这个懒惰的想法上了楼，迈进屋子的时候，

女中がそだや石炭箱の散らばった床に膝をつき、ものすごい煤煙を立てながら石炭殻をかぶせて火を消している最中だ。これを見て、たちまち僕は逆もどりした。帽子をかぶり、四マイルの道をてくてく歩いて、ヒースクリフの家の庭木戸にたどりついたとき、ありがたいことに、ちょうど吹雪の始まりの鷺毛のようなのがチラチラと落ちてくるのを、うまく避けることができた。

この吹きさらしの丘の頂は、霜で土が黒くこちこちに凍り、寒気は体じゅう震えるほどだ。木戸の鎖がはずせないから、飛び越えて、ぼうぼうと乱れ伸びているグズベリのやぶで縁どられた盛土道の石だたみを走ってゆき、扉をたたいて案内を求めたが、誰もあけてくれぬ。そのうち指の節は痛くなり、犬どもはやかましくほえたてた。

「ひどい人たちばかり住んでる家だ！」僕は心のなかで叫んだ。「こんな意地のわるい客あしらいでは、とうから世間があんたがたを相手にしないのも当りまえですぞ。ぼくだってまさか昼間から扉にかんぬきまでおろしておきやしない。かまうもんか——はいつてゆこう！」そう決心すると、僕は掛け金をつかんでやたらに揺すぶってみた。すっぱい顔のジョーゼフが、納屋の丸窓から首を突き出した。

「何してなさるだ？」爺さんは叫んだ。「旦那は羊小屋ですがな。旦那に話があるなら、納屋の向こうをまわって行かせい」

「家の中には扉をあげてくれる人はいないのか？」カッとして、こちらもどなり返すと、

看见一个女仆跪在地上，身边是扫帚和煤斗。她正在用一堆堆煤渣封火，搞起一片弥漫的灰尘。这景象立刻把我赶回头了。

我拿了帽子，走了四里路，到达了希刺克厉夫的花园门口，刚好躲过了一场今年初降的鹅毛大雪。

在那荒凉的山顶上，土地由于结了一层黑冰而冻得坚硬，冷空气使我四肢发抖。我弄不开门铤，就跳进去，顺着两边种着蔓延的醋栗树丛的石路跑去。我白白地敲了半天门，一直敲到我的手指骨都痛了，狗也狂吠起来。

“倒霉的人家！”我心里直叫，“只为你这样无礼待客，就该一辈子跟人群隔离。我至少还不会在白天把门闩住。我才不管呢——我要进去！”如此决定了。我就抓住门闩，使劲摇它。苦脸的约瑟夫从谷仓的一个圆窗里探出头来。

“你干吗？”他大叫。“主人在牛栏里，你要是找他说话，就从这条路口绕过去。”

“屋里没人开门吗？”我也叫起来。

嵐が丘

「奥さまのほかには誰もいましねえだ。おまえさまが晩までやかましい音たてて、おどかしたってあけなさる気づけねえわ」

「どうして？ おまえがぼくのことを奥さまに話してくれるわけにゆかんのかい、ジョーゼフ？」

「いやです！ わしやそんな掛り合いはまっぴらです」

爺さんの首は、そうつぶやいたと思うと、ひっこんでしまった。

雪は本降りになってきた。僕はもういっぺんと思って、掛け金をつかんだ。そこへ、上着を着ない一人の若い男が、熊手を肩にかついで、裏庭に姿を現わした。この男が僕に、ついて来いと声をかけたので、男といっしょに洗濯場の中を通り、石炭置場、ポンプ、はと小屋などのある石だたみの一画を通り抜けて行くと、やがて昨日も通された暖かな居心地よろしい大部屋にたどりついた。石炭、泥炭、まき木をいっしょくたに、ふんだんにくべた大炉のほてりが、心楽しく室内をあたたため、しかも夕餉のごちそうをどっさり並べた食卓の近くに、さっきまでそんな人のいることさえ思いもよらなかった“奥さま”なる婦人を見いだしたときは、僕はすっかりうれしくなった。一礼して、さてご婦人がおかけなさいと言ってくれるかと、そのまま待った。彼女は、椅子に背をもたせかけたまま僕を見て、身じろぎもせず、啞のように何も言わぬ。

「ひどいお天気でございますね！」僕は言った。「失礼ながら、ヒースクリフ夫人、お玄関の扉は、お召使たちがのんびりお客を待たせるので、よほど丈夫でないといけませんようですな。わたしもご案内を頼むのに、よほど骨を折りました」

“除了太太没有别人。你就是闹腾到夜里，她也不会开。”

“为什么？你就不能告诉她我是谁吗，呃，约瑟夫？”

“别找我！我才不管这些闲事呢，”这个脑袋咕嘟着，又不见了。

雪开始下大了。我握住门柄又试一回。这时一个没穿外衣的年轻人，扛着一根草耙，在后面院子里出现了。他招呼我跟着他走，穿过了一个洗衣房和一片铺平的地，那儿有煤棚、抽水机和鸽笼，我们终于到了我上次被接待过的那间温暖的、热闹的大屋子。煤、炭和木材混合在一起燃起的熊熊炉火，使这屋子放着光彩。在准备摆上丰盛晚餐的桌旁，我很高兴地看到了那位“太太”，以前我从未料想到会有这么一个人存在的。我鞠躬等候，以为她会叫我坐下。她望望我，往她的椅背一靠，不动，也不出声。

“天气真坏！”我说，“希刺克厉夫太太，恐怕大门因为您的仆人偷懒而大吃苦头，我费了好大劲才使他们听见我敲门！”

相手はあくまで口を開かぬ。僕はその顔を見つめた——向うも負けずに僕を見つめる。とにかく、あくまで冷やかな、気にとめぬさまで、こっちの顔にじっと目をすえている——どうにもたまらなくバツがわるいし、気がわるい。

「掛けなさい」さきの若い男がそっけなく言った。「すぐに来ます」

そこで僕は腰をかけて、せきばらいを一つして、それから例の追剥ぎ婆ア^{おはば}のジュノーに声をかけると、それでも二度めの対面だから、僕を知ってるというおしるしだけ、ほんのお情けにしっぽの端のほうを振ってくれた。

「美しい犬でございますね！」僕はもう一度やりはじめた。「奥さま、あの子犬たちをよそへおやりになるお気持はおありですか？」

「あたしのじゃございません」世にも愛想よき奥さまのご返事は、ヒースクリフの返事もよもやこれほどにはできまいと思うほど、取りつく島もない調子だった。

「あななるほど、あなたのお気に入りはこちらにおりましたか？」と、僕はまだあきらめずに、なにか猫らしいもの^{ねこ}がいっぱいいる薄暗い隅^{すみ}のふとんのほうへ向きなおって、言ってみた。

「まあおかしなお気に入りですこと！」彼女はさげすみきった調子で言った。

運のわるいことに、それは死んだ兎^{うさぎ}のかたまりだったのだ。僕はもう一度、せきばらいをし、それから、夕方からひどく荒れてきたようですなどと月並みな挨拶^{あいさつ}を繰り返しながら、炉のほうへ椅子を近寄せた。

她死不开口。我瞪眼——她也瞪眼。反正她总是以一种冷冷的、漠不关心的神气盯住我，使人十分窘，而且不愉快。

“坐下吧，”那年轻人粗声粗气地说，“他就要来了。”

我服从了；轻轻咳了一下，叫唤那恶狗朱诺。临到第二次会面，它总算赏脸，竖起尾巴尖，表示认我是熟人了。

“好漂亮的狗！”我又开始说话。“您是不是打算不要这些小的呢，夫人？”

“那些不是我的，”这可爱可亲的女主人说，比希刺克厉夫夫人所能回答的腔调还要更冷淡些。

“啊，您所心爱的是在这一堆里啦！”我转身指着一个看不清楚的靠垫上那一堆像猫似的东西，接着说下去。

“谁会爱这些东西那才怪呢！”她轻蔑地说。

倒霉，原来那是堆死兔子。我又轻咳一声，向火炉凑近些，又把今晚天气不好的话评论一通。